

BOOK REVIEW

皮膚外用剤の教科書

著：大谷道輝

熱狂の皮膚外用剤の教科書！

指導者のいない療養型病院で薬剤師をしていた20代、私は衝撃の論文に出会った。それは軟膏とクリーム剤を混合するとどうなるかという、基剤の物理学的安定性に関する論文だった。皮膚外用剤の大家、本書の著者の論文である。薬局で何の疑問も抱かずに外用剤を混ぜ混ぜしていた当時の私には、まさに目から鱗である。臨床の問題を丁寧に抽出し、基礎研究で裏付け、こんなに面白い研究ができるのかとあまりにも感動し、それ以来、臨床薬学研究に目覚めている（後ほど著者にお聞きすると、当直中の外用剤混合指示に疑問を感じたのがきっかけの研究という）。

著者の皮膚外用剤に関する講演を聞いた人は多いだろう。いや、皮膚科領域に携わる医療従事者で、著者の講演を聞いたことがない医師、薬剤師はいないはずといっても過言ではないかもしれない。臨床における皮膚外用剤治療の実践を、薬学として作り上げた著者の講演は、コンテンツが素晴らしいのはもちろん、ストーリーもプレゼンテーションも最高である。患者さん目線の生きた指導が目につくようである。著者の講演を聴講すると、いつも手元のメモがいっぱいになり、論文が面白いと感動した20年以上前のことが先日のように思い出される。そして、いつも聴講者であふれ大人気の様子をみるにつけ、ファンは私だけではないのだととても嬉しく思う。

本書は、そんな著者の集大成ともいえるだろう。何十年という月日と莫大な労力をかけて、文献もないような情報を、一つひとつ探求した皮膚外用剤のすべてが詰まっている。外用剤周辺のQuestionを網羅的に取り上げ、重要なテーマは徹底して論じている。論証の質は高いが、説明はあくまでもコンパクトで読みや



B5判／285頁

定価：4,400円（本体4,000円＋税10%）

発行：南山堂（2024年6月発行）

すい。ときどき飛び出すトリビアが知識欲をそそり、雑学としても面白い。皮膚外用剤の薬学的学問の広さが卓越した、見事な書籍になっている。その学問にふれ、途方もなく幸せな気分になる。そして著者が生涯をかけ、精魂を込めた仕事だという感動が伝わってくる。

20代の私が著者の論文に衝撃を受け、研究に目覚めたように、多くの医療者に感動を届けたい。開講！大谷塾。皮膚科診療にかかわるすべての職種にオススメの一冊である。

広島大学病院薬剤部 副薬剤部長 柴田 ゆうか